Mole Hole Letter B（１）：愛民心

もぐら通信

最初の、垂れ目の少女Bならぬ、もぐらの穴通信・mole hole letter Bをお届けします。

もともともぐら通信といふ月刊誌に連載の題名のMole Hole Letterですが、この名前を思ひついたのは、アメリカの作家でヘンリー・ダヴィッド・ソローといふ人の書いた『ウオールデン　森の生活』といふ本の内容を知り、このアメリカ人の気分が私の生活にあつてゐることから、それなら土の中のもぐらの穴から消息を届けるのは如何かと思つてみたからです。私は生まれも育ちも北海道ですから、伝統といふ観念は完全に欠落してゐます。安部公房が三島由紀夫との対談で率直に述べてゐるのと同じです（『二十世紀の文学』）。かういふ人間にアメリカ文学といふのは非常に魅力的に見えるのです。否定すべき対象としての伝統すらないといふ人間です。

このソローの原題は『Walden; or, Life in the Woods』といふのですが、この文字と記号の並びを素直に読めば、ウオールデンといふ人がゐて、この人物のことを言ひ換へれば（これがorの意味）、森の中での生活すること生きることがウオールデンだ、私だといふ意味になるでせう。ウオールデンは人間ですから、Lifeと大文字で書かれた言葉の意味を命とか生命と、少し意味の範囲を広げて理解することもできます。

この森での生活期間は１８４５年７月４日から２年2ヶ月２日に亘るといふことですので、この数字の並びの２・２・２といふ俗にいふゾロ目にも、この作者の人生観が出てゐるのかも知れない。博打の好きな人で、そんな都会の生活に疲れて、森の中に隠棲したのかと思つて経歴を調べると、当たらずとも遠からず、ハーヴァード大学といふアメリカの一流の大学を卒業してゐながら、その後の生活は職を転々としてまるで箱を被り直す箱男の如し、やはり近代国家としてのアメリカ合衆国を肯定する人々の生き方に対して全く異質の、正反対の人生を求めて生きた人です。Wiki：https://ja.wikipedia.org/wiki/ヘンリー・デイヴィッド・ソロー

アメリカ人の文学といふものを読むと、歴史や伝統がなくとも、そこに人間がゐて生きようとするだけで文学が生まれるといふことが判ります。正確にいふと、文学の生まれる場所が生まれる。安部公房がアメリカの文化の持つ大衆的な普遍性に惹かれるのは、よく理解することができます。コカコーラ、ジーンズ等々、安部公房の読者であるあなたにいふだけ、釈迦に説法。

先の戦争中に使用された言葉は戦後は皆禁句になつてしまつてゐるといふ正気を失つた時代をもう７５年余も日本人も日本の国家も生きてきてゐる。安部公房の世界に周知の言葉を使へば、これらの禁句は、見てみぬふりをされて来た公然の秘密である。これらは、あの最後には古新聞のやうに燃え上がる仔象のやうな言葉たちであり、タブー（禁句）であると思つてみると一層形象（イメージ）ははつきりします。目の前にあるのに見えないふりをするといふ見猿・聞か猿・言は猿の三猿主義で７５年余を過ごして来た政治制度を「戦後民主主義」といふことが、これで判ります。そこにある言葉に目を瞑つて文化がありえるか。さて、この見ないふり文化についての当時の安部公房の発言です。今も少しも古くなく、それどころか益々新鮮です。

この『愛民心』といふ見出しの全集１ページ分の朝日新聞による談話記事は、１９６６年１０月３日付の発表ですから、当時の子供の私の記憶にもありますが、この談話記事で記者の問ひかけた問は「期待される人間像」をどう思ふかといふ問に対する安部公房の回答なのです。それが、愛国心に対する愛民心といふわけです。当時は確かに、期待される人間像といふ主題が大人たちの世界で議論されてゐたことは、新聞とTVを通じて、子供の私の耳に響いて来てゐました。文部省が掲げ、どういふ人間が日本人として望ましい人間像かといふ議論です。

子供が大きくなるにつれて必要とする人間は、やはり理想の人間像であつて、当時はまだ偉人伝といふものがシリーズで大きな出版社から出版されてゐた時代でした。野口英世とかエジソンとかシュヴァイツァー博士とか豊臣秀吉に徳川家康とか、他にも有名な独自の人生を歩んだ時代の英雄・ヒーローたちの伝記です。今は、それがすつかりなくなつてしまつたことに問題があるでせう。生きるための人間的な規範が身近な文字の中になくなつてしまつた。子供の悩みはいつも変はらない筈で、一体私は如何に生きるべきかといふことです。未来の時間は予測がつかない。だとしたら、これは大人の悩みと同じことで、それなら都会へ出て一旗あげようか、立身出世をしようか、それともソローみたいに田舎に隠棲して人生を送るか、といふのが両極端の二つの人生です。私たちは今もこの両極端の間を振り子みたいに揺れた生活をしてゐる筈です。

安部公房がいふのであれば、愛民心は、当然に超越論ですから第三の道を行くわけです。安部公房は次のやうに語つてゐます。これがあなたの解決策になるかどうか：

期待される人間像などといふ「ああいうものは、いずれ陳腐に決まっているけど、愛国心を持ち出しているところなど、ここまで来たかという感じが強いですね。国民に愛国心がないと思うから強調するんだろうけど、愛国心はリトマス試験紙で検出したり、実験でなん％、なんグラムというふうにとり出すことができない。だから愛国心を持ち出すことは、非国民という反対概念を成立させることになる。宗教裁や踏絵の役割を果たしちゃうんだなあ」

というと？

「権力の側にある人にとって国民を御しやすくする。だけど両者の関係は御者と馬ではないんだから、これはマズイですね。国民の愛国心を確かめたければ、日本人でいたいかどうか国民投票で問うてみればいい。日本人でいたくない人は外国にゆけばいい。でも九九％までは日本人でいたいというでしょう。それでいいんじゃないかな」

なるほど……。

「国を愛するというと、当然のように考えて疑わないけど、どうして国という単位を第一に考えるのか疑問だな。だって国家は目的ではなく手段でしょ。民主国家は主権在民で、国家は国民のためのものなんですからね。体制の側が国民大衆に人間の理想像をとくのは当らないんで、こちらから彼等に要求する権利があると思う。さし当り、愛民心を要求したいな。国民一般の立場を尊重せよということですね。」

あなたの理想の政治家像・官僚像や如何に？

愛国心のある政治家は自称他称でたくさんゐるやうですが、愛民心を標榜する政治家といふのは聞いたことがない。愛民心をいふ政治家に次は一票入れることにしませう。でも多分、誰もそんな政治家は選挙に出馬しないのではないかな。

このやうに出馬といふ言葉を書いてみると、大陸育ちの安部公房のいふ御者と馬の関係といふのは実にピタリと当てはまつてゐる。

人間を馬に譬（たと）へるのは、ヨーロッパならば最高の人間に対する軽蔑の表現です。古代ギリシャのソクラテスから（「喉の渇いてゐない馬を水飲み場につれてきてもそんな馬には水を飲ませることはできない」ーエロスのない馬鹿な人間のことです）、スイフトの『ガリヴァー旅行記』から（馬の国）、安部公房の小説中の馬に至るまで（『箱男』その他）。

問：ところで、御者と馬の関係にあつて、政治家や官僚は馬なのか？それとも国民が馬なのか？
答：　　（あなたが自分でお書き下さい。）